



TITLE:

唐鼎州窯は宋耀州窯の前身であろ
う

AUTHOR(S):

愛宕, 松男

CITATION:

愛宕, 松男. 唐鼎州窯は宋耀州窯の前身であろう. 東洋史研究 1968,
27(1): 21-37

ISSUE DATE:

1968-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152763>

RIGHT:

唐鼎州窯は宋耀州窯の前身であらう

愛宕松男

一 文獻よりする唐鼎州窯の輪郭

唐鼎州窯の名は、周知の如く、陸羽が喫茶用瓷盃を品評するに際し、そこでの製作に係る盃器を取上げて論じているところから、既に早く人口に膾炙されてきた。「茶經」卷二にいう

盃。越州上。鼎州次。婺州次。岳州次。壽州・洪州次。或者以邢州處越州上。殊爲不然。若邢瓷類銀。越瓷類玉。邢不如越一也。若邢瓷類雪。則越瓷類冰。邢不如越二也。邢瓷白而茶色丹。越瓷青而茶色綠。邢不如越三也。……越州瓷・岳瓷皆青。青則益茶。茶作白紅之色。^①邢州瓷白。茶色紅。壽州瓷黃。茶色紫。洪州瓷褐。茶色黑。悉不宜茶。

ここでの鼎州瓷は實に、越州青瓷に亞ぐ第二位という高い評價を蒙っているのである。もっともそれにも拘らず、この鼎州瓷に關する叙述は冒頭における唯の一言に限られ、岳州瓷以下の下位品に就いてなされているような附言、つまり夫の顔色釉による呈色の仔細が全く觸れられていないのは何としても不可解であるが、しかし少なくともこの品評の對象として取上げられ、且つ茶器として天下第二品の折紙をつけられた鼎州瓷である限り、それは青瓷もしくは青白瓷であつたに違いない。何となれば、喫茶用具としての立場からなされた陸羽のこの品評は、専ら容器に茶を盛つた際の茶の呈色に重點をかける關係上、茶の綠色をはえしめる青瓷が最貴重視され、茶の綠色を殺す乳白色瓷・黃瓷・褐瓷は貶されている

のであるから、越州青瓷に亞ぐものとしての榮譽を與えられた鼎州瓷が黒瓷や黄瓷であつてはならないからなのである。だがしかし、それにしても、鼎州窯器に對してそれが青瓷だという説明を殊更らここで陸羽が省略しているのは、草卒には見逃しえられない點なのであつて、その眞意については後節で言及するはずであるが、豫め特にここで注意を喚起しておかなければならない。

中唐の初期、當時の數ある諸窯場を押えて越州青瓷に亞ぐ製品を産出していた名窯、しかもそれは北方中國での唯一の有名窯でもあつたこの鼎州窯は、それにも拘らず、晩唐から五代・宋以後に引續いて文獻上にその消息を絶えて残さないし、その窯址についても何一つとして知見が傳わっていない。これまた不可解といへばそう云えないこともない事態であつて、注目を要する第二の點であるが、とにかく中唐の世に鼎州窯の名を以て稱せられていたという現實を唯一の據り所として、一應その位置が比定できるわけであるし、事實また比定されて來てもいるのである。現今の陝西省西安市の北北西、涇水に臨む涇陽縣を以て之に當てる説は、藍浦「景德鎮陶錄」より以來の定説として遵奉されている。しかしながら果してこの比定でいいものなのであろうか。先に指摘した一二の疑問を考え并せて、もう一度更めて唐鼎州窯の所在を問題にし直すのは、この點からするも決して無意味ではないであらう。

二 宋耀州窯に對する在來の知見

唐鼎州窯の所在地が右に見た如く、現今の涇陽縣の地にあつたとするならば、宋耀州窯は之に極く近接して存在したことにならねばならないであらう。何となれば、宋の耀州は現今の耀縣に當たるのだから、涇陽縣との距離三十キロメートルは決して遠いとはいえないのである。唯しかし、距離的にはかくまでに近接していたこの兩窯ではあつても、その年代的な開きが兩者を判然と別物にする。少なくとも唐鼎州窯・宋耀州窯という限り、前者は唐代の、後者は宋代の窯場を意味するのであるから、それは當然な事體でなければならない。尙おこの點については、耀州なる州の起源を尋ねて、それ

が五代に始まる事實を確知することによつても、それを論ずることができよう。

耀州の創設を記す第一史料としての「新唐書」地理志では

華原縣……天祐三年李茂貞墨制。以縣置耀州。

のように、之を哀宗の天祐三年（九〇六）に係けてゐる。時の鳳翔節度使・岐王として全關中を制覇した李茂貞が朝廷の公許もないまま恣いままに、華原縣を州に昇格せしめたのが耀州の抑ゝの始まりであつたという。爾來、五代の間を通じて多少の變革はあつたが、耀州の名は概して踏襲せられる期間が多く、次第に安定した州名となつてゆく。「五代史記」職方考三にいう

耀州本華原縣。唐末屬李茂貞。建爲耀州。置義勝軍。梁末帝時。茂貞養子溫韜以州降梁。梁改耀州爲崇州。義勝曰靜勝。後唐復爲耀州。改曰順義。

従つて五代をうけた宋が舊に仍つて耀州を稱してより以來、金元明の三代をへて清朝に至るまで、この州名は一貫してまた變らず、以て現今の耀縣に及ぶのである。このように見てくると、州名としての耀州は唐も滅亡する前年に至つて始めて出現し、五代中期に降つて漸く安定するという設置沿革をもつものであつたから、その名稱に耀州の名を冠して耀州窯と命名されるからには、この窯場の起源を尋ねても、それは精々五代中期までしか遡りえないはずであらうとは、常識的な一應の判斷でなければならぬ。そして事實、耀州窯の消息が記され始めるのも宋代の文獻からなのであり、その文獻が確言する所は他ならぬ耀州窯宋代起源説なのであるから、當然そこに宋耀州窯という限定された稱呼が生じ、それがこれまで正しい指示だとして一般に受容されてきた。この限り、唐鼎州窯と宋耀州窯とは唯、單に距離的に近接した兩地方で興亡した二つの窯場にすぎなかつたのである。

耀州窯に關する最も早い記録は、周知の如く陶穀の撰と稱せられる「清異錄」である。卷三器具の條にいう

小海鷗。耀州陶匠創造一等平底深盤。狀簡古。號小海鷗。

「宋史」卷二六九の本傳によれば、唐昭宗天復三年（九〇三）宋太祖開寶三年（九七〇）の生涯をもった陶穀であるから、たとえ宋に入って十一年間の晩年をすごしたとはいえ、寧ろ彼は五代の人と稱すべきであり、従って「清異錄」がもし彼の著作であるならば、その記述も五代の同時資料に屬するとしなければならぬであらう。しかしながら「清異錄」の撰者については夙に異論のある所であり、内容から推して、太宗朝の江南出身者をこれが撰者とする説に從いたい。そうだとすれば、耀州窯の消息はやはり宋代文獻に初見することになる。従って右に掲げた所謂の小海鷗なる盃器は、北宋も初期に屬する耀州窯の製品となるわけであるが、青瓷か白瓷かの別はここでも示されていないけれども、とにかく當時の士大夫社會で話題となるようなかかる盃器を造製していたという一事から、北宋民窯の代表的な一としての實を耀州窯に確認することは妥當の至りでなければならない。

北宋の耀州窯は民窯であつたけれども、同時に又その燒造器を朝廷に貢納した。「宋史」卷八七地理志の陝西路耀州の條には「貢瓷器」とあつて、瓷器のみ一種類の貢獻が錄せられている。地理志が掲げる貢獻の目にはそれが何時代の制に基づいているのかを明言していないが——恐らく元豐の制度ではないかと思われるが——耀州に課せられた貢獻である限り、南宋ではなくて北宋期の事實であることは紛れもない。殊に天下の州縣多しといえども、河南府の瓷器——均窯・汝窯——信德府の白瓷——邢窯——を除いては、唯この耀州のみが瓷器を貢納せしめられているのであるから——破損率の高い瓷器には、當然その運輸の困難が考慮されて、専ら黃河流域の製產州のみにこの貢獻が割當てられたのであらう。従つて瓷器の貢納を課せられていない州（例えば饒州・紹興府の如き）だからといって、直ちにその州が瓷器を製產しなかつたとは勿論いいえないのであるが——この點をも并せ考えれば、耀州窯を以て當時北方での名窯の一であつたと見なしでも強ち過言とはならないであらう。それはとにかくとして、朝廷に貢納するからには質の精良な佳器でなくては叶わない。民窯では勿論すべてがすべてかかる佳器ばかり燒造しているのではなく、大部分は民間に供給する粗器であらうが、しかしそれにしても年々きまつた數量だけの佳器を上納せねばならないのであるし、事實それだけ上納したのもあるとすれば、この窯には既にかんがりの技術と規模とが

確保されていたに違いない。その次第を窺う資料として、元豐七年九月の立石にかかる耀州窯土山神の碑文を左に引用してみたい。

宋耀州太守閻公奏封德應侯之碑

三秦張隆撰并書及題額

熙寧中尙書郎閻公作守華原郡。粵明年時和政通。奏土山神封德應侯。……侯據黃堡鎮之西南。附于山樹。青峰四回。淥水傍瀉。草木奇怪。下視居人。如在掌內。居人以陶器爲利。賴之謀生。巧如范金。精比琢玉。始合土爲坯。轉輪就制。方圓大小。皆中規矩。然後納諸窯。灼以火。烈焰中發。青煙外飛。煨煉累日。赫然乃成。擊其聲鏗鏗如也。視其色溫溫如也。人猶是賴之爲利。豈不歸于神之助也。至有絕大火。啓其窯而視之。往往清水盈勻。昆虫動活。皆莫究其所來。必曰神之化也。陶人居多沿長河之上。日以廢瓷投水。隨波而下。至于山側。悉化爲白泥。殊無毫發之餘混沙石之中。其靈又不可窮也。……

大宋元豐七年九月十八日立石。鎮將劉德安 張化成 三班奉職監耀州黃堡鎮酒稅兼烟火呂潤^⑤

黃堡鎮とは耀州城の北北西十五キロメートルに在る鎮で、「金史」二〇、地理志にもその名を掲げられている外、喬三石の「嘉靖耀州志」卷二地理志にも

黃堡鎮一名黃堡寨。……鎮故有陶場。居人建紫極宮祀其土神。宋熙寧中知州閻作奏。以鎮土山神封德應侯。以陶冶著靈應故也。……

とあって、北宋以來の由緒ある聚落である。この黃堡鎮の西南、漆河に臨んで宋耀州窯が存在したのであるが、熙寧・元豐の交には玉器にもまがう精緻溫潤な瓷器が——誇張した表現ではあろうが——そこで製産されていたという。時の知耀州事閻作がその地の郷土神のために封爵を乞い、許されて德應侯の爵位が賜與された經緯の間にも、朝廷への瓷器貢納に預る耀州窯だからという配慮が恐らくあったなればこそであらうし、他面その郷土神土山神が全くの陶冶神として取扱われ

ている裡にも、居民を擧げて陶業に参加している窯場としての性格が正しく看取さるべきなのである。

宋もその前半期たる北宋を終ると、耀州の地は金國に編入される。この金國の治下で、耀州窯が技術の進歩・生産規模の擴大を來したとは先ず考えられない。精々のところ、北宋以來の傳統保守に汲々として尙お足らなかつたのではないだろうか。金代の文獻で耀州窯を述べたものは殆ど見當らない模様であるが、幸に南宋側には些少ながらもその缺を補うものが存する。例えば南宋初の周輝「清波雜志」卷五定器の條であるが、そこには金國から南宋に來った士人の言だとしてこう傳えている。

又嘗見北客言。耀州黃浦鎮燒瓷器。名耀器。白者爲上。河朔用以分茶。出窯一有破碎。卽棄于河。一夕化爲泥。^⑦

黃浦鎮とあるのは、傳聞のこととて黃堡鎮を誤つたのであらうが、とにかく金代に入つても耀州窯は引續き活動していた。ただここで注意しなければならないのは、北宋初期に青瓷窯として發足したと傳えられるこの耀州窯が——耀州青瓷については後述する坦齋筆衡を参照せよ——南宋期はその主要技術を専ら白瓷に注ぐようになったという變化である。もっともそうはいつても、青瓷の製造は之を全く廢止したわけではない。同じく南宋初期の陸游「老學菴筆記」卷二には、當時の耀州青瓷を記して次のようにいつているから

遂寧出羅。謂之越羅。亦似會稽尼羅而過之。耀州出青瓷器。謂之越器。似以其類餘姚縣祕色也。然極粗樸不佳。惟食肆以其耐久多用之。

この地の青瓷も江南地方にまで輸出されるほどに盛んに燒造されていたのであるが、これらは専ら厚手造りの堅牢さと祕色まがいの釉色を賣り物にした普製品、つまり一般料理屋あたりに向く中下流品^⑧が主たるものであつたのである。この間の事情は、傳世耀州瓷に對してなされている品評に照しても、甚しい齟齬を生ぜしめないのが重視さるべきなのである。ではここで「飲流齋說瓷」に見える許之衡の説を聞いてみよう。

耀窯。在西安耀州。亦宋時所建。初燒青器。仿汝而略遜。後燒白器。較佳。初製者其釉透亮如玻璃。其色微黃。略似

蝦青色。後製者其釉略混。其色甚白。有似牛乳之白。有似粉油之白。有似熟麥米之白。不等。耀窯有一稱細胎・細釉者。胎極薄而帶有暗花。釉極細而帶有開片。不知者往往以定呼之。其實非也。蓋其胎雖薄而仍比定略厚。其釉雖細而仍比定略粗。其色雖白而仍比定略閃黃也。而暗花・開片亦與定微有不同。

乃ちこれによれば、宋耀州器では先ず青瓷であり、次いで白瓷が擡頭する。初期の青瓷は汝窯には及ばなかったというのであるから、それでも可成り高い品質のはずであり、現に玻璃のような透明釉が施されていたという。續く白瓷に二類があり、一は失透釉白瓷、二は今一つ定白に近い細胎細釉白瓷である。第二の細胎細釉の白瓷が「清波雜誌」にいう上等产品であり、之に比べて厚手の失透明釉瓷が、「老學菴筆記」のいう厚手青瓷と共に金代耀州民窯を代表する一般商品向きの瓷器であつたに違いない。

北宋から金を通じて、大した零落もなく製産活動を續けた耀州窯に關して、宋代文獻はこのように委細な記録を残しているのであるが、ではその起源については何如なのであろうか。耀州窯の起源を述べる文獻としては、今までの所まず葉寘「坦齋筆衡」しかなさそうである。ここでは陶宗儀「輟耕錄」卷二九によつてその内容を窺うことにする。^⑧

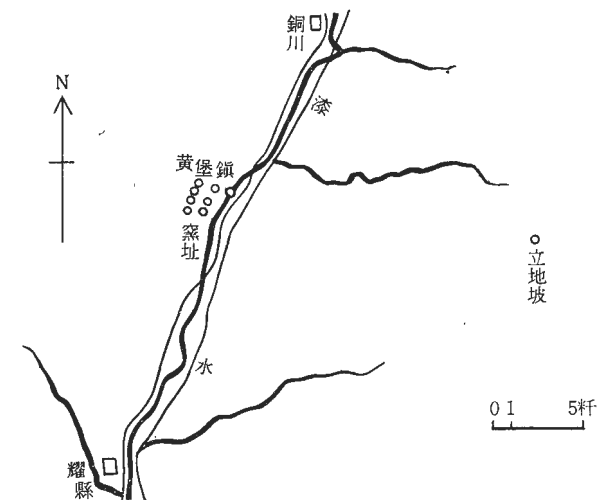
宋葉寘坦齋筆衡云。……本朝以定州白磁器有芒不堪用。遂命汝州造青窯器。故河北・唐・鄧・耀州悉有之。汝窯爲魁。……

乃ち汝州窯の設置に刺戟されて江北の諸地方に青瓷窯が興つた際、耀州窯もその一として成立したといふのであるから、勿論その起源は宋代に入つてからだとする説である。葉寘のこの説には、格別な根據が示されているわけでもないけれども、何しろこれ以外に耀州窯の起源に觸れた説とてない關係上、誰しも一應これに従つてきた。もっとも前に引用した張隆の德應侯碑には、東晉永和年間（三四五―三五六）、栢林なる人物がこの地に来て、甄陶の術を居民に教え、ここに耀州窯の基礎が開かれたとする土地の古傳承を紹介しているが、勿論これをそのまま信用することはできない。とすれば、從來からの定説に従つて耀州窯北宋起源説を認めるか、乃至は慎重を期して、少なくとも宋人にはそう考えられていたと

限定してかかるか、孰れにしてもこの問題についてはこれ以上の態度が執りえられないのであるが、事實は果してそれで十分だったのであろうか。

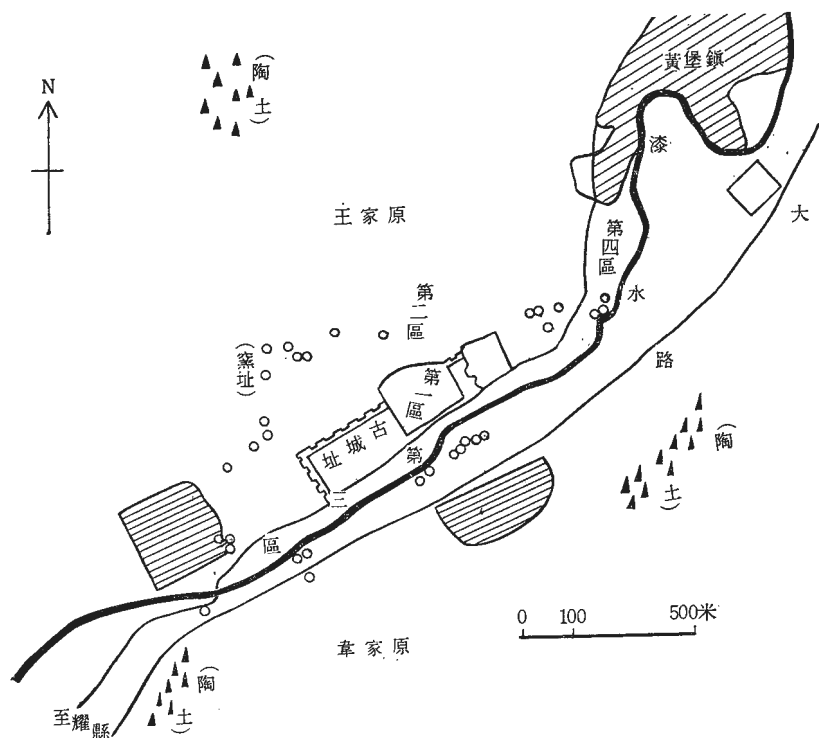
三 耀州古窯址の現地調査によって得られた新事實

陝西省考古研究所が一九五八年秋から翌年十一月にかけて行った耀州周辺の古窯址調査は、唐・元に互る古窯址・作坊址など若干座の外、八萬五千有餘にのぼる多量の瓷片を發掘調査することができ、收穫の多い成果を擧げることになった。幸にしてその調査報告書「陝西銅川耀州窯」（一九六五年、陝西省考古研究所刊）も公刊されて、詳細な結果が判る段階になっているので、之に基づきここに問題の必要資料を摘出略記することができる。



(A)

この調査の對象となった地區は三ヶ所、乃ち耀縣北北東十五キロの黃堡鎮・銅川市東南十五キロの立地坡・立地坡の東面七キロ（銅川市東南東十七キロ）の上店村であるが、うち後二者は元代の窯址に係るものであるから（A圖参照）、ここでは姑く慮外に置く。必要なのは黃堡鎮の東南、漆水に沿うて「十里窯場」の稱を持っていた古窯址なのである。位置的にいつて之が宋耀州窯に當たるはずであるし、又その見込の下に發掘されたのであるが、出土品の示す所は全く意外にも、宋の遺物に始まらないでその先に更に唐の遺物が見出されたのであ



(B)

る。乃ち瓷片包含層は四層に分れており、第四層には専ら唐の遺物のみを、第三・第二層には宋金元の遺物を混じ、そして第一層には金元の遺物を限って収めていた。尙おその上に、唐と宋以降との間には相當明瞭な地區的区分も認められるのであって、最南に位する發掘第三區が唐代及び北宋晚期、北西に偏した第二區が北宋初期・中期と金元時代、中央部第一地區が北宋中期、黄堡鎮に南接した最北部の第四區が北宋中期といった概略である（B地圖・分期表を参照）。

遺物その物については、第一期文化に屬する唐代のそれが、碗・盤・盆・壺を主としてすべて敞口・平底。唯一つ白釉小粉盒の蓋に黒色花紋を彩繪するがこれは全くの例外事例をなし、他はすべて素面ばかりで、刻花・印花も施されていない。釉は黒色・白色釉が主をなし、黄色・綠色釉これに次ぎ、淡青色釉は極めて稀少である。胎釉ともに厚くして不透明釉を使用し、且つ施釉は口部・腹部に限られて下腹部・足部には及ばないという

黃堡鎮古瓷窯遺址文化分期表

期三第 元・金	(宋北) 期二第			期一第 唐	文化分期
	晚期	中期	早期		
第二區 第二區 第二區	第三區 三層	第一區 第二區 第三區 第四區	第二區 三層	第三區 第三區 第三區 第四區	地層堆積
4、刻有「大安二年」「至元十一年」等紀年銘。紹興錢・正隆錢。	1、姜黃色青釉・黑色釉・青色釉・月白色青釉器。 2、胎釉粗厚。胎面不上白衣。 3、花紋種類多樣化。	1、青色釉最多。次有月白色青釉器。 2、胎釉更薄。胎面上白衣。質地堅硬。釉光亮。 3、花紋范印間刻劃。 4、花紋中刻印「大觀」・「政和」紀年銘。	1、青色釉最多。次有醬色釉。 2、胎薄釉勻。胎面上白衣。質地堅硬。釉面裂紋者較多。 3、紋飾以刻劃簡單的蓮花瓣。牡丹花紋較多。	1、白色・黑色釉器最多。次有黃色・綠色・淡青色釉器。 2、胎釉粗厚。胎面不上白衣。釉不透明。 3、白色釉器稀有黑色花瓣花草等簡單紋飾。 4、開元錢。	主要包含物及特點

加わって、ここに所謂る宋代耀州窯器の特徴が顯されてくるのである。

右の要約を内容とする銅川耀州窯址の發掘調査結果が彌した成果として、先ず第一に、文獻による考證の上からまた傳

特點を具えている。之に對して第二期文化に屬する宋代遺物では、先ず器形が唐代に比べて増加する。胎土も灰白土を使用した上にエンゴベを施すようになり、釉も少數の黑色・醬色釉を除いて殆どが半透明の青色釉に進化し、且つ刻花・印花の紋飾が出現するのである。もっとも、早期宋代遺物に在っては、顔色釉では既に専ら青色釉に轉換してはいるものの器形は前代の白色釉瓷盃に近似的、胎釉ともに未だ粗厚の域を脱しないのであるが、かかる前代的特色も中期に至って完全に消滅する。乃ち胎は薄く釉は勻しく、燒成も高火度を用いる所から體質の堅硬化を來し、更にその上に印花紋の裝飾が

世遺品の鑑賞の上から、宋耀州窯に與えられていた從來の評価を再確認せしめることになった點を擧げることができよう。しかしながら、それにも増して重要な貢獻は何といつても、耀州窯の起源に關する從來の定説を大きく破り、云われ來った如くそれが宋代に始まったものでは決してなくて、遠く唐代に濫觴するものだったとする實證でなければならぬであろう。しかも唐代といつても、それが唐初にまで遡りうるものであることは、これら窯址の遺物を西安市東郊の韓森寨で最近に發掘調査された天寶期の墳墓出土品と比較せしめて得られた結論なのである。黃堡鎮の古窯が、初唐から唐一代を貫通して五代・宋に連續するもの、つまり完全な唐代窯でもあったというこの新知見は、唐鼎州窯とこの耀州窯との關連を更めて問題にしうる餘地を拓くことになるであろう。何となれば、距離的に至近の關係に在ったこの兩窯が、それにも拘らず判然と別個のものとして決められて來たのは、一に係つて前者は唐の窯場、後者は宋に創まる窯場という越え難い時代差があったなればこそであるが、それが今や、共に唐代窯としての時期的同一性を保證されることになったばかりでなく、唐代でのその製品がこれまた齊しく青瓷もしくは青白瓷を持つていた事實が實證されてきたからである。では鼎州窯と耀州窯とはいかに關連せしめられるのであろうか。

四 唐鼎州（雲陽縣）と宋耀州（華原縣）の地理的關連

唐一代を通じて、鼎州を稱せられた地は三箇所をかぞえる。一は武德元年（六一八）～貞觀八年（六三四）の間の鼎州であつて、これは現今の河南省靈寶縣西南三十里に位する弘農故縣城に治した。二は天授二年（六九〇）～大足元年（七〇二）の間の鼎州で、これは現今の陝西省涇陽縣の北方三十里に位する雲陽故縣城に治した。三は天祐三年（九〇六）～梁貞明元年（九一五）の間の鼎州で、現今の陝西省富平縣の東北六十三里に位する美原故縣城に治した。この三地のうちで、初期中唐人たる陸羽が藉りて以て窯名に附した鼎州とは、その時代的近接からいつても第二の鼎州と見なすが最も妥當である。從來この鼎州窯を論ずる限り、誰もが之に異議を唱えなかつたのも尤もである。^⑩

則天武后朝に建置され又廢止されたこの鼎州とは、ではどの範圍の管區を持ちどの地點に治したのであったらうか。この點に關する考察が、これまでややともすれば疏略に過ぎたように思われる。「舊唐書」地理志には、鼎州廢置について多少の年代的混亂があるが、「新唐書」地理志はよく之を修正している。新志によれば、武后の天授二年、それまで雍州一州を以て京兆の二十餘縣を統轄していた體制を改めて、鴻・稷・宜・鼎の四州を新設し、雍州と并せて京兆五州の制が敷かれた。「唐大詔令集」卷九十九にも、天授二年七月九日付の「置鴻宜鼎稷等州制」が載っている——この新設四州の内容は次の通りである。

鴻州——渭南倚・慶山・高陵・櫟陽四縣

稷州——始平倚・武功・奉天・壄厓・好畤五縣

宜州——永安倚（後改縣名爲華原）・同官・富平・美原四縣

鼎州——雲陽倚・涇陽・醴泉・三原四縣

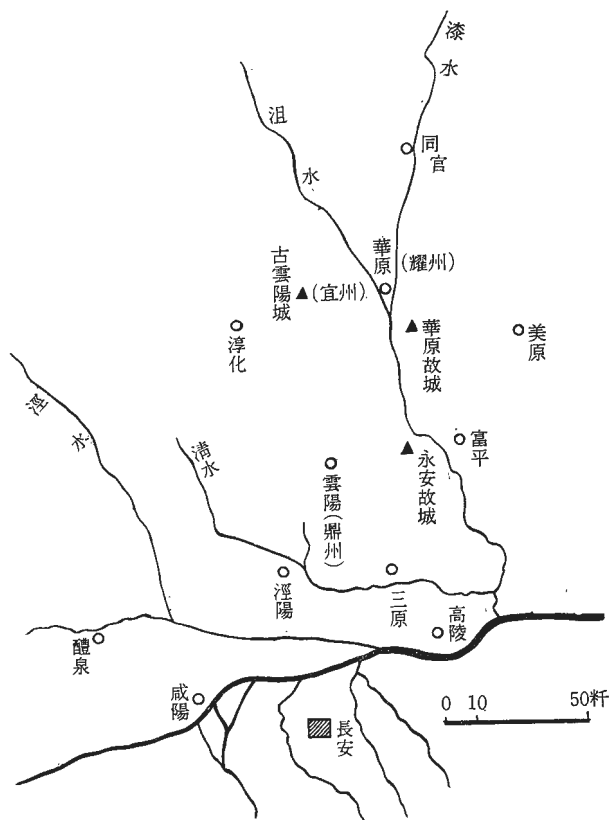
但しこの四州といっても、今の場合に問題となるのは宜州と鼎州だけである。便宜上まず鼎州から考證を始めるが、その倚郭たる雲陽縣とは現涇陽縣の北方三十里に位する隋代創設の縣であつた。隋がここに雲陽縣を設置したのは、その地が秦漢の雲陽縣の一部に相當する所からであるが、ここで注意しなくてはならないのは、秦漢の雲陽縣治と隋唐の雲陽縣治とが別個であつたことである。宋白の「續通典」も云うように^①

雲陽故城。在今縣西北六十里。

雲陽故城、乃ち秦漢の雲陽縣城は宋の雲陽縣、乃ち隋唐以來の雲陽縣城と六十里の距離をへだつ兩地をなしていた。中國古今地名大辭典（商務印書館發行）によると、この故城は現在も淳化縣西北（東北？）に存しているという。従つて唐鼎州の管區は、涇水下流域兩岸の地から東北に向つて清水を越え、漆水中流西岸に迫る範圍であつた。之に對して宜州はといえ、涇水下流域兩岸から漆水中流域東岸にかけての地域を領しているから、鼎州・宜州の兩州は略、漆水を界として隣接

耀州。秦爲内史地。漢爲左馮翊地。魏晉時屬北地郡。後魏置北雍州。西魏改宜州。又置北地郡。尋改爲通川郡。開皇初郡廢。大業初州廢。以其地屬京兆郡。唐武德初復置宜州。貞觀十七年省入雍州。天授二年復置宜州。於雲陽。大足初罷。天祐初李茂貞僭置耀州及義勝軍。……

顧祖禹のこの見解がもし正しいとすれば、天授二年の宜州は古雲陽城に、鼎州は雲陽縣城に治して、これ又その倚郭の縣境を南北に隣接し合っていたこととならねばならない。殊にもしこうだとしたならば、雲陽城という名稱上の共通項を仲



し合っていたわけである。しかも宜州の倚郭たる華原縣は現耀縣の東南に位する華原故城なのか、現三原縣の北方三十里に位する永安故城なのか、乃至はそれ以外の地點なのか、にわかには決定し難い状態にある。宜州州治が華原故城・永安故城に在ったのならば、これは鼎州雲陽縣と接續する地域であるから、宜州・鼎州は單に州境を接するのみではなくて、倚郭の縣境をも互に東西に接し合った關係に立つてであらう。殊に輿地學の大家であつた顧祖禹の見解では、天授二年設置の宜州城は雲陽故城に治したとする。

「讀史方輿紀要」卷五十四にいう

介として——現實には新古の別があつたのではあるが——兩者を混同する蓋然性は益々高まるはずである。

中唐期の江南に生きた陸羽は陝西地方の詳しい地理に通じなかつたとしても、當時としてそれは當然である。殊に問題の宜州・鼎州というのは共に、陸羽の生前半世紀も昔に、しかも女帝の氣紛れから僅か十年間という短命で終焉し、且つその後ついに再建されなかつた特殊な二州である。且つ兩者は上記のように隣接し合ひ、更には雲陽城という共通名さえも持つ錯綜關係にあつたのである。これだけの條件が具備していれば、陸羽ならずとも兩者の混同は避け難いであらう。正確には「古雲陽縣城を州治とする宜州管内の黃堡鎮寨」とでも稱すべきであらうが、ついでに「雲陽縣寨」と理解されれば、すぐにも「鼎州寨」と混稱されうるはずである。かくして宋代に降ると、ここでは五代から始めて出現し來つた新州名耀州が管區の上でも華原・富平・三原・雲陽・同官・美原の六縣を領するのだから、天授年間の宜州・鼎州は共にその中に包括されることになり、従つて嘗て唐代での宜州・鼎州混同の問題も無意識の裡に解決されてしまうことになる。つまり耀州寨とさえ云えば、それは黃堡鎮寨を指す場合、決して誤つた稱呼とはならないし、それに寨場の命名に普通な大區劃主義——例えば杭州德清縣寨も越州寨の名によつて稱せられる類である——にも適っているから、當然そう稱せられたはずであるが、唐の宜州・鼎州をその中に包括した宋のこの耀州を以て命名するなら、同時にそれは嚴密な意味での唐宜州寨にも唐鼎州寨にも適合する稱謂とならざるをえないからなのである。實質的には鼎州寨（＝宜州寨）を指す言でありながらも、耀州という全然別個の州名を以てそれを稱しなければならなかつた宋代にとつては、その結果として意識の上に於ても、唐鼎州寨と宋耀州寨の斷絶を來さずにはおかなかつた。黃堡鎮寨という實體は唐宋を通じて一つであり、しかもそこでは初唐から宋に亘つて連綿する實績を擧げていたのであるから、唐でも宋でも當然その寨場は看過されるはずはなく、現に世人の注目をひいて唐では鼎州寨・宋では耀州寨と稱せられていたのであるが、惜しいかなこの兩州名の間に連關が缺けていたため、遂に實體その物までが互に無關係な二物として意識され理解されてしまつたのである。

以上の考證を以て、私は唐鼎州寨が宋耀州寨の前身だつた事實を證明しえたものと信ずる。この考察にしてもし正し

いとするとすれば、第一節で指摘しておいた唐鼎州窯に關する兩つの疑點も自ら氷解することであらう。乃ち一は、陸羽によつて越窯に亞ぐ名窯として推賞された鼎窯でありながら、以後その消息の傳えが皆無である點への疑問である。之は更めて説明するまでもなく、實質的には耀州窯の名で傳わっているものであつて、唯、名稱の相違から、傳わる所がなかったように錯覺されただけなのである。續いてその第二は「茶經」の瓷盃品評に於ては茶の呈色を左右する重要要素として瓷器顔色釉が最大の關心事をなしていたのであるから、天下第二品の折紙をつけた鼎州瓷に對しては當然それが青瓷であるからとの附言があつて然るべきなのに、獨り鼎州瓷にのみ之が缺けている不可解さであつた。之については、初唐以來その窯場活動を續けていた黃堡鎮窯第三區では、現に白瓷を主としながらも間、淡青瓷をも燒造していたのであるから、陸羽がこの淡青瓷を取上げて越州青瓷に亞ぐ名品だと評しえたわけなのであるが、その反面この窯場は越州の上林窯や德清窯のような青瓷專一の窯ではなくて寧ろ白瓷を主とする窯であつた所から、鼎州器は必ずしも青瓷ではないという現實を顧慮せざるをえない。このために「茶經」では特に鼎州瓷のみに例外を許して「鼎州瓷は青し」という肝腎の定義を之から削除しなければならなかつたのであると説明して、第二の疑點も極く圓滑に通融せしめることができるというものであらう。

註

① 茶經のこの一節は、少なくともこのままでは意が通じない。

「茶作白紅之色」は衍文であるか、然らざればその間に脱文があるうと指摘し、脱文があるならそれは鼎州瓷・婺州瓷の瓷色についての敘述だったかもしれない、とする日比野丈夫氏「唐宋時代の二、三の磁窯」（立命館文學一一四號）の見解に同感である。

鼎州瓷の瓷色が若しここに述べられていたとするならば、恐

らくそれは「鼎州瓷青白」の一語であつたらう。蓋し、茶の色を理想的な縁に呈色せしめる越州・岳州の青瓷には及ばなくとも、それを丹・紫・黒色に濁らす邢州白瓷・壽州黃瓷・洪州褐瓷に比ぶれば、よりすぐれて、淡紅色の程度に止めるというのであるから、瓷色は自ら白瓷がかつた青瓷色、つまり青白色でなければならぬのである。後述するように、唐鼎州窯の後身たる宋耀州窯址から發掘された唐代青瓷は淡青色瓷なのである

から、この事實に照しても右の推測は撞着しないであらう。或いはまた原文に訛字を認めるだけで、衍文・脱文は想定しない見方も成立しえられよう。この場合ならば、白紅を白緑の訛として一應その意味を通ぜしめることができる。

② 朱琰「陶說」卷五說器中、宋器の項には酒榼の目を立て、「瓷宮謂耀州青榼」という「清異錄」の一節を例引しつつ并せてその考釋をなしている。榼とは鸛鷄榼の略稱で、榼形をなした飲酒器であるというのがその説明であるから、朱琰は「清異錄」のこの記載を以て、宋代耀州窯が青瓷の酒器を燒造していた證左となしているのであるが、しかしそれだけの結論では未だ不完全たるを免れないことになるであらう。それというのも「清異錄」の本文では——寶顏堂秘笈本にはこの箇所が缺漏している。說郛本による。——晚唐の士人韋炳の逸話を掲げ、その説明として陶穀がそれを「宋代の」耀州青榼だと斷じているのであるから

雍都酒海也。梁奉常和泉病于甘、劉拾遺玉露春病于辛、皇甫別駕慶雲春病于醢。光祿大夫致仕韋炳取三家酒。攪合澄饗飲之。遂爲雍都第一。名瓷宮集大成。瓷宮謂耀州傳（青）榼。

この文獻は唐代に耀州青榼の名稱があったという資料では勿論ないけれども（耀州なる州名は李茂貞に始まる以上、唐代にかける稱呼が存しうる餘地は全くないのであるが）——この限り、朱琰がこの記載を掲げて宋代耀州青瓷の資料とするのは、それ自身決して誤りとはなしえられない。——唯しかし問題の瓷宮そのものは、あくまでも晚唐期に嚴存した事物に相違ないのである。従つて、もし「清異錄」のこの斷定が正鵠をえたもので

あったとするならば、勿論それは宋耀州窯の前身をなす唐代窯の製品に係らねばならないはずであらう。本論文の後段で考證するように、宋耀州窯の前身は唐鼎州窯なのであるから、的確にその命名して記録されてはいないけれども、實は晚唐期鼎州窯青瓷の消息がかかる形でここに傳えられているのである。つまり「清異錄」の著者は、唐鼎州窯の青瓷を當時宋代にひきあてて耀州青瓷と稱していたわけである。

③ 「資治通鑑」卷二六八には次の記事を掲げて

「梁太祖」乾化元年三月壬辰。岐王募華原賊帥溫韜。以爲假子。以華原爲耀州。美原爲鼎州。置義勝軍。以韜爲節度使。使帥郿岐兵寇長安。詔感化節度使康懷貞・忠武節度使牛存節。以同・華・河中兵討之。

一見したところ、李茂貞による耀州創設を乾化元年（九一一）に係けるかの如くであるが、當然この日付は溫韜の長安侵寇にかけるべきもの、従つて耀州設置はこれに先行するものである、この點、「新唐書」の天祐三年説と協調しうる餘地を持っている。

④ 「舊五代史」卷八、梁末帝本紀によれば、梁朝に耀州が崇州と改められたのは貞明元年（九一五）十二月であるし

貞明元年十二月乙未。詔改華原縣爲崇州靜勝軍。以美原縣爲裕州。以爲屬郡。以僞命義勝軍節度使・鼎耀等州觀察使・特進檢校太保・同平章事李彥韜爲特進檢校太傅・同平章事。充靜勝軍節度使・崇裕等州觀察使・河内郡開國侯。仍復本姓溫名昭圖。昭圖華原賊帥也。李茂貞以爲養子。以華原爲耀州。美原爲鼎州。僞命昭圖爲節度使。至是歸款。故有是命。

同書卷三十、唐莊宗本紀によれば、この崇州を再び耀州と改稱したのは同光元年（九二三）十二月に屬する。

同光元年十二月戊寅、詔改爲梁耀州靜勝軍。復爲順義軍。

⑤ 餘嘉錫「四庫提要辨證」卷十八に、この考證は詳しい。

⑥ 喬三石「嘉靖耀州志」にはこの德應侯碑についての記載はあるが、碑文その物を收録してはいない。近時の公刊にかかる「陝西銅川耀州窯」が幸にも附録として、この碑文を収めている。

⑦ この神秘的傳説は、前に引用した「德應侯碑文」にも見えるもの、恐らく北宋初期以來の傳承であろうが、それが時代を南宋に降り土地を江南に移しても、略、原のままの形で傳播して來ているのは興味深い。

⑧ 「老學菴筆記」のこの記述に對して、陳萬里氏は耀州青瓷の佳品と粗品の二種類をそこに理解しようとする。乃ち越器と稱せられるものは前者であり、食肆で使用されるものは後者であると見るのである。（「中國青瓷史略」第二章第五節）鄧之誠氏「骨董瑣記」卷二耀州越窯も又略、これと同じ見解である。しかしながら陸游のこの一文は、前後に兩分してこのような解釋を果して充てうるものであろうか、疑を容れざるを得ない。本論ではかかる解を採らなかつた。もつとも陸游が目して粗器とするのは、相對的な意味での粗器なのであつて、當時の士大夫が常用したであろう景德鎮の青白瓷・龍泉窯の青瓷に比較しての言に違いない。

⑨ 葉寅が南宋人であることは、彼が修内司窯・郊壇窯について語っている所から分明である。唯、南宋といつても初期か後期

か、その判定はつけられない。彼の著書「坦齋筆衡」は現在說郭に收められて傳わっているが、この說郭本は甚しい缺本であるから、本文に引用する箇所は見當らない。従つてここでは「輟耕錄」引用の文を使用する。

⑩ もつとも最近では日比野丈夫氏「唐宋時代の二三の磁窯」が第一の鼎州、乃ち河南省靈寶縣下の弘農故縣城説を採っている。

⑪ 宋白「續通典」は散佚書であるから、勿論ここで使用するのはその引用された一節である。「資治通鑑」卷五六、漢紀桓帝永康元年の條に見える漢の雲陽縣に註して胡三省が之を引用している。

— 四二・十一・廿日稿了 —